

〔論文〕

『叡智』の一詩篇に見られるヴェルレーヌの信仰

大熊 薫

La foi verlainienne vue dans un poème de *Sagesse***Kaoru OKUMA**

要旨 (résumé) :

Le but de ce mémoire est d'examiner la foi catholique de Verlaine après sa conversion, son retour à l'église catholique pendant son emprisonnement à Mons.

Il a pu recevoir la communion le 15 août 1874 et il est redevenu catholique. Et il a exprimé ses sentiments religieux dans son œuvre *Sagesse*. Nous en avons extrait un poème écrit après la communion pour connaître l'état d'âme de ce néophyte. Ce poème, c'est III-VIII : *Parfums, couleurs, systèmes, lois!*

En examinant les expressions de chaque vers, nous avons trouvé des contrastes parmi les mots ; *Fleur et Calice* dans le huitième vers, *délice et supplice* dans les douzième et treizième vers, *les damnés et les Saints* dans le quatorzième vers, etc.. Le contraste entre *Fleur et Calice*, renvoie à l'éphémère et à l'éternité, *délice et supplice*, au plaisir terrestre et au remords religieux, *les damnés et les Saints*, au profane et au sacré.

Verlaine a démontré sa foi catholique par ces contrastes. Mais de quelle foi s'agissait-il? Ce n'était pas la foi naïve accompagnée du bonheur qui se trouve souvent dans le cœur du néophyte, mais c'était la foi douloureuse où coexistent deux cœurs : son âme faible voulant retourner à la vie ancienne et profane, et la croyance chrétienne cherchant à se rapprocher de Dieu. De là vient la lutte sanglante.

C'est tout à fait ainsi qu'est vécue la foi catholique de Verlaine. Le poète, en mettant sa foi à nu dans ces vers, nous montre combien ce poème est véritablement chrétien.

キーワード：神、キリスト、対照法、聖、俗、カトリック

序論

『叡智』(*Sagesse*)は、1880年12月にカトリック系出版社バルメ書店から刊行された。詩集は三部構成で、49の詩篇からなる。三部構成にかんして、ルイ・モーリスは「その各部は…中略…彼の三段階の宗教的精神状態に呼応している¹⁾」とし、「第一部は…中略…新しく回心した信者と古い自己との戦いであり²⁾」、「第二部はイエスが詩人を待っている。そこでは崇高な会話が行われ、実に神秘的で……³⁾」、「第三部は…中略…神と人との一致である。⁴⁾」(下線部は原文ではイタリック)と主張することで、各部にそれぞれ異なった統一テーマを見出そうとする。

しかし、実際には、第一部の、詩篇「XIII」、「XIV」、「XVI」などにおいて、宗教に対するヴェルレーヌの心の葛藤は見出せない。第二部は、神とヴェルレーヌの対話を中心テーマであり、これにかんしては、ルイ・モーリスの解釈は正しい。ところが、第三部における詩篇「IX」は、1872年冬に創作された、彼の回心以前の作品である。また、1889年出版の第二版で削除された詩篇「XVII」(*Tournez, Tournez*…)「回れ、回れ、…」は、その詩句の大部分が、『言葉なき恋歌』(*Romances sans paroles*, 1874年)の「ベルギー風景」(*Paysages belges*)における「ブリュッセル 木馬」(*Bruxelles Chevaux de bois*)からの借用である。ジャック・ロビシェもルイ・モーリスの「三段階の宗教的精神状態に呼応している」という解釈には否定的である⁵⁾。

さらに、ヴェルレーヌ自身が、どのような意図で『叡智』を三部構成にしたのか、また、それぞれの詩篇をいかなる配慮をもって、その中に配置したかなど、一切言及していない。

このように、それぞれの部が第二部を除き、何らかの明確なテーマによってまとめられているとは言い難く、各詩篇の配置は、いわば無政府状態であるように思われる。それゆえ、この詩集を第一部から順に第三部まで、筋書きのあるドラマとして捉えようとするには、かなり強引な論証が必要となるであろう。

ところで、彼が獄中で読んだとされる書物、あるいは聖書の語彙と彼の詩句との比較検討は、ルイ・アゲタンやルイ・モーリスその他、多くの研究者によって、詳細に行われている。日本でも、『叡智』の先行テキスト研究、

あるいは19世紀フランスのカトリックが『靱智』に及ぼした影響、などの研究はなされている。ところが、今日まで、フランスおよび日本において、ヴェルレーヌの信仰そのものについての、具体的な検証が行われてこなかったことは、驚くべきことである。

そこで、われわれは、これまで誰も踏み込まなかったヴェルレーヌのカトリック信仰そのものの中に分け入り、詩人の信仰がいかなるものであったかを考察する。その手段として、彼が獄中で創作した詩篇の中でも、彼がカトリック信者として正式に認められた1874年8月15日の聖体拝領以後、その日付に近い作品の中から一篇を採りあげようと思う。なぜならば、獄中における回心の道程において、彼はさまざまな精神的困難に遭遇し、最終的には1874年8月15日、聖母被昇天の祝日に、聖体拝領が許されるのであるが、それ以降、カトリック信者として創作した詩篇のひとつを分析することは、詩人の信仰を詳細に検証するための重要な足がかりとなる、と考えるからである。

第一章

第三部 詩篇「VIII」が創作されるまでの概略

彼のカトリックへの回帰が始まるのは、モンスの独房の中からである。1874年6月のある日、刑務所長が彼に悪い知らせを持って来る。その知らせとは、ヴェルレーヌと妻マチルドとの別居、および財産分離を通告する裁判所からの命令であった。これを読んだヴェルレーヌは、「泣きながら、粗末なベッドに仰向けになって崩れ落ちた⁶⁾」。やがて彼は以下のような「本当の小さな(大きな?)精神的奇跡⁷⁾」(() は原文のまま)を語る。『 』内は原文では大文字。

何が、あるいは『誰か』が、私を突然起こし、服を着る間もなくベッドの外に放り投げたのか、それは分からないが、私は涙にくれて十字架と聖心画の足下にひれ伏した。義務を超えたその姿は、最も奇妙ではあるが、私の目には、現代カトリック『教会』の中で、最も崇高な献身を喚起するものであった⁸⁾。

この時から、詩人の回心が始まる。われわれは、彼の信仰がいかなるものであったかを探るため、『叡智』の中でも、この「精神的奇跡」以後の詩篇を分析の対象とする。その理由は序論で既に述べた。その結果選ばれたものは、『叡智』第三部の詩篇「VIII」である。この作品が創作された日付は1874年の終わりであり、聖体拝領の3～4ヵ月後である。以下にその詩篇を引用する。

- 1 Parfums, couleurs, systèmes, lois!
- 2 Les mots ont peur comme des poules.
- 3 La Chair sanglote sur la croix.

- 4 Pied, c'est du rêve que tu foules,
- 5 Et partout ricane la voix,
- 6 La voix tentatrice des foules.

- 7 Cieux bruns où nagent nos desseins,
- 8 Fleurs qui n'êtes pas le Calice,
- 9 Vin et ton geste qui se glisse,
- 10 Femme et l'œillade de tes seins,

- 11 Nuit câline aux frais traversins,
- 12 Qu'est-ce que c'est que ce délice,
- 13 Qu'est-ce que c'est que ce supplice,
- 14 Nous, les damnés et vous, les Saints?

- 1 香り、色彩、システム、法則！
- 2 言葉は雌鳥のようにおびえている。
- 3 『肉体』は十字架の上ですすり泣いている。

- 4 足よ、お前が踏み潰しているのは夢だ。
- 5 そしていたるところで声があざ笑っている。
- 6 群集の心を惑わす声が。

- 7 われわれの計画が浮かんでいるたそがれの空が、
- 8 『聖杯』ではない花々が、
- 9 酒が、そして滑り込むお前のしぐさが、
- 10 女が、そしてお前の胸の流し目が、

- 11 冷たい枕の甘い夜が、
- 12 この恍惚はいったい何なのだ、
- 13 この拷問はいったい何なのだ、
- 14 劫罰を受けたわれわれ、そしてあなたたち、聖人よ？

第二章

語彙研究および詩句の解釈

「1 香り、色彩…」

この二文字を読む者は誰でも、ボードレールの『照応』(Correspondances)を思い浮かべるであろう。

8 Les parfums, les couleurs et les sons se répondent.⁹⁾

8 香り、色彩そして音が互いに応えあう。

このように、語彙の配列にかんしては、ヴェルレーヌとボードレールのそれとは同じであり、ヴェルレーヌがボードレールの『照応』をここで意識していたことは確実である。しかしその後続く語はまったく異なる。

「1…システム、…」

ヴェルレーヌが言う「システム」とは何か。われわれはヴェルレーヌが友

人のルペルチエに宛てた手紙の中の数通に、その語を見出す。以下、それを年代順に引用する。

引用1 ()は原文のまま。『 』は原文では〈 〉。

それぞれの詩は300から400詩行のものとなるだろう。——それらの詩句は、今から僕が完成しようとするシステムに従って創作されるだろう。それはポー（何て単純なんだ、この『狡賢いやつ』は！別の日にそれについては君に語るつもりだ。というのも、僕は英語で彼の作品は全部読んだ）のように幼稚ではなく、とても音楽的なもの、そして同時にできるだけ生彩に富んだものとなるだろう。…中略…僕のシステムを知るまで笑わないでくれ。これは今僕が抱いているたぶんすばらしい考えなのだから。

手紙L、1873年5月16日金曜日 ジュオンヴィル¹⁰

引用2

僕は努力が感じられることをもう望まない。一旦僕のシステムが頭の中でしっかり構築された暁には、これまでとはまったく別の方法で、グラチニーの自由自在さに到達したい。もちろん彼の平凡さは伴わずにね。

手紙LII、1873年5月23日 ジュオンヴィル¹¹

引用3 「 」は原文では大文字。()は原文のまま。

僕は『マリアに捧げる賛歌』（「システム」に則って）と「初代教会」の祈りを作った。

手紙LVIII、1873年11月24日から28日 モンス¹²

引用4 下線部は原文ではイタリック。

最後の3つのソネ、これは僕がジュオンヴィルからの手紙で語っていたシステムだ。しかしこれは試みでしかない。これは古いシステムだ。作るには易しすぎるくらいだ。しかし読むのはそれよりはるかに面白くない、そうだろう。

手紙LIX、1873年末 モンス¹³

引用4における「最後の3つのソネ」とは、この手紙の中でヴェルレーヌがルベルチエに書き送った『1874年の僕の暦』(*Mon Almanach pour 1874*)の三部作「春」(*Printemps*)、「夏」(*Été*) および「冬」(*Hiver*)を指す。また、「ジュオンヴィルからの手紙で語っていたシステム」とは、引用1の「システム」である。その後の手紙の中には、「システム」という語はもはや見出せない。引用3における、「システム」に則って作られた『マリアに捧げる賛歌』とは何か。ジャック・ボレルは「われわれはこれについて何も知らないし、既に詩集『叡智』のことが問題となっていたかどうかは疑わしい。¹⁰⁾」と冷たい。ジンメルマンは上記に引用した手紙から、ヴェルレーヌの「システム」とは「音楽性と生彩に富んだ、しかしながら複雑なもの¹⁵⁾」と解釈し、彼の詩法との関連性でこの語を捉えようとする。

詩句の冒頭、「香り、色彩、…」とボードレールの『照応』との類似性を考慮に入れれば、ヴェルレーヌがここで言う「システム」は、ジンメルマンと同様、何らかの詩法にかんする詩人の考え方、あるいは体系として捕らえられるべきであろう。ただし、それがいかなるものであるかについての考察は、本論とは係わり合いが薄いと思われるので、別の機会にそれは譲ることとし、ここでは「システム」とは、詩法にかんするヴェルレーヌの用語、程度にとどめたい。

「1…掟!」

これについて、ヴェルレーヌが『叡智』においてどのような用い方をしたか、それを以下に挙げる。

引用5

9 Son doigt ganté de fer entra dans ma blessure

10 Tandis qu'il attestait sa loi d'une voix dure.

I-I¹⁶⁾

9 鉄の手甲をした彼の指は僕の傷口に入った

10 その間彼は厳しい声で自分の掟を示していた。

9 J'entends encor, je vois encor! Loi du devoir

I-xviii¹⁷⁾

9 僕には今なお聞こえる、今なお見える！義務の掟が

「第一部 18」

「第一部 1」が創作されたのが1875年夏であり、「第一部 18」は、1881年6月である。ところで、ここでわれわれが検討の対象としている詩篇は1874年の終わり頃に創作された。すなわち、「第一部 18」で用いられた「掟」と「第一部 1」の「掟」との間には、かなりの時間的隔りがある。そのため、「掟」に含まれる意味のレベルにおいても、何らかの相違があるという可能性は否めないかもしれない。しかしながら、引用5における「掟」は、それら詩篇全体の流れの中では、そのどちらもキリスト教の「掟」と関連があることは確かである。「1…システム、掟！」における「掟」も、この詩篇第3詩行、第8詩行あるいは第14詩行と関連付ければ、キリスト教の「掟」と解釈することが、最も自然である。

「2 言葉は雌鳥のようにおびえている。」

ここで、第1詩行で用いられた言葉や、それに伴うその他のさまざまな、例えば詩法にかんするボードレールや自分の言葉などが、何かの理由で、雌鳥のようにおびえている、と解釈できるであろう。しかしかなりの曖昧さが残る。確かに、「言葉」が第1詩行で用いられた四語あるいはその他の単なる言葉と捉えることは、この詩行の流れからは自然である。しかし、その後の表現「雌鳥のようにおびえている」にかんしては、なぜおびえるのか、なぜ雌鳥なのか、説明がつかない。そこで、この詩句を、次の第3詩行「3『肉体』は十字架の上ですすり泣いている。」との関連で解釈してみよう。

キリストは十字架に架けられる前に、ペトロに対して彼の信仰を問う。ペトロは「たとえ、みんながあなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません¹⁸⁾。」と自分の固い信仰をキリストに表明する。しかしキリストは彼

の弱さを見抜き「はっきりと言っておく。あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう¹⁹⁾。」と予言する。実際にキリストが十字架に架けられる直前、人々がペトロに対し、彼がキリストと共にいたと言ったとき、ペトロは三度、キリストを否む。「そのときペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、『そんな人は知らない』と誓い始めた。するとすぐ、鶏が鳴いた。ペトロは、『鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう』と言われたイエスの言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた²⁰⁾。」

聖書のこの箇所とヴェルレーヌの「4 言葉は雌鳥のようにおびえている。」とを関連付けて解釈すれば、「自分の信仰の言葉はペトロのそれと同じように、最後にはキリストを否むのではないかとおびえている」となる。

しかしながら、これだけでは、先に分析した第1詩行「香り、色彩、システム、法則！」の「言葉」は中に浮く。第2詩行の最初に用いられた「言葉」を、われわれは、「第1詩行で用いられた言葉や、それにとまなうその他のさまざまな、例えば詩法にかんするボードレーヌや自分の言葉」だと解釈したからである。

そこで、われわれは、この二つの解釈、すなわち、キリスト教的な信仰の「言葉」と詩法にかんする「言葉」を以下のように重ね合わせてみよう。

ヴェルレーヌは回心によって、キリストと共に生きようと決心した。しかし、パウロと同様、信仰の言葉は裏切りのそれへと変化するのではないかと詩人は恐れる。それと同様に、詩を創造するその言葉が、作詩法や詩的イメージなどを含めたあらゆる詩空間において、裏切りへと変化するのではないかとおびえている。

以上の解釈は、第1詩行と第2詩行を巧みに結びつけるための、ひとつの試みである。聖書に表現された内容を、強引にこの詩行と関連付けたとはいえ、この解釈の正当性は認められるのではないだろうか。

「3 『肉体』は十字架の上ですすり泣いている。」

ペトロがキリストを「知らない」と否んだ後、キリストは十字架にかけられる。ここで言う「肉体」は十字架上で苦しむキリストである。

「4 足よ、お前が踏み潰しているのは夢だ。」

第3詩行で詩人は十字架上のキリストを見ている。それゆえ、ここで表現される「足」は、単なる足ではなく、釘付けにされたキリストの「足」である。キリストの「足」にかんして、「創世記」第3章15節を想起しよう。

お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕きお前は彼のかかとを砕く²¹⁾。

神が救い主によって、人間の犯した罪を許すと最初に約束をしたこの箇所は、いわゆる「原福音」と呼ばれるものである。「お前」は悪を意味し、「彼」はキリストを暗示する。「彼はお前の頭を砕き」は、キリストによる悪魔の敗北を意味し、「お前は彼のかかとを砕く」とは、悪魔はキリストに小さな傷しかつけることができない、という神の予言である。神はその正義で人類を罰し、その愛で人類を救う。実際、十字架上でキリストの足は釘付けにされる（「お前は彼のかかとを砕く」）が、キリストはその死後3日目に復活する（「彼はお前の頭を砕き」）ことで、悪魔に勝利し、これによって神の正義と愛は成就された。

ところで、ヴェルレーヌは、キリストの足が踏み潰しているのは「夢」と表現する。しかし、聖書では、キリストが踏み潰すのは「悪」である。詩人はここで「悪」＝「夢」と表現する。キリストは悪を踏み砕くことで復活し、悪に勝利したことを考慮に入れば、ヴェルレーヌは、キリストの復活をすなわち「夢」だ、と表現していると解釈できるであろう。このように表現することで、自分にとって、復活は夢でしかなく、救いの希望は十字架上のキリストには見出せない、とヴェルレーヌは嘆くのである。

「5 そしていたるところで声があざ笑っている。／6 群集の心を惑わす声が。」

「声」は『叡智』の至る所で見出すことができる。例えばその代表として、「第一部 19²²⁾」が挙げられる。

1 Voix de l'Orgueil : … 「1 傲慢の声…」

……

5 Voix de la Haine : … 「5 憎悪の声…」

……

9 Voix de la Chair : … 「9 肉の声…」

……

13 Voix d'Autrui : … 「13 他人の声…」

……

17 Colères, soupirs noirs, regrets, tentations

18 Qu'il a fallu pourtant que nous entendissions

19 Pour l'assourdissement des silences honnêtes,

……

17 怒り、暗いため息、後悔、誘惑

18 これらの声に耳を貸さなければならなかった

19 誠実な沈黙の音をかき消すために。

21 Ah, les Voix, mourez donc, …

21 ああ さまざまな声よ、死んでしまえ…

このようなさまざまな声が自分をあざ笑い、その信仰を惑わしている、とヴェルレーヌは表現する。

「7 われわれの計画が浮かんでいるたそがれの空が、」

「われわれの計画」とは第2、第3および第4詩行などの流れの中から、「キリストを裏切る計画」である、と解釈される。この解釈を正当なものとする根拠は聖書にある。すなわち、キリストは裏切られ、十字架に架けられて息を引き取ったのは、「既に昼の12時ごろであった。全地は暗くなり、それが3時まで続いた。太陽は光を失っていた²³⁾。」時間帯であり、ヴェルレー

ヌの表現する「たそがれの空」である。しかし、ヴェルレーヌの場合、その「計画」はまだ決定的ではなく、「浮かんで」さ迷っている。

「8 『聖杯』ではない花々が、」

『聖杯』とは、永遠の命であるキリストの血を注ぎ込む、永遠に聖なる杯である。ところが「花々」はやがて枯れてしまう、地上のはかない存在物である。この両者が対立する。

「9 酒が、そして滑り込むお前のしぐさが、」

「酒」はキリストの血として『聖杯』に注がれるものである。しかし同時に、一時的に人を酔わす地上の「酒」でもある。「滑り込むお前のしぐさ」とは、『聖杯』にキリストの血である酒が注がれる有り様を表現すると同時に、自分の杯に地上の酒が自らすすんで入ってくる、いつの間にか何杯も杯を重ねてしまうという、二重の意味がこの詩行に含まれている。

「10 女が、そしてお前の胸の流し目が、」

第9詩行の「花々」は、地上のはかない美しさ、すなわち女性を導き出すための布石でもある。地上の酒に酔った詩人は女性を想う。「お前の胸の流し目」とは、女性の胸が詩人の目をそこに引き付け、詩人の魂をこの地上の世界へと誘惑していることを意味する。

「11 冷たい枕の甘い夜が、」

「甘えた、愛らしい」を意味する形容詞 *câline* の動詞は *câliner* で、赤ん坊や女性を優しく愛撫するという意味をもつ。ここでは、第10詩行の女性を詩人は優しく抱いて、冷たいベッドへ共に入るのである。そこにはこの世の快樂が待ち受けている。

「12 この恍惚はいったい何なのだ、」

詩人はその女性と共にいることで、えもいえぬ恍惚感に浸る。それはキリスト信者となったときのあの幸福感とはまったく異なる。

引用6 『 』は原文では大文字。

ああ、本当に恐ろしい。しかし、人間はこれほど悪であり、ただ生まれたことによって、これほど失墜し罰せられているとは！——腐りきった、いやしい、ばかげた、高慢なそして——地獄落ちした！！このいまわしい社会から引き上げられたという、無限の幸福を味わうとき、僕は歴史的、科学的その他の証のことを語っているのではない。それらはみな『盲目』なのだ²⁴⁾。

これは1874年9月8日付けの、ルベルチエに宛てた手紙の一部である。ヴェルレーヌは聖体拝領後の新信者としての喜びを、「無限の幸福」と感じ取っていた。しかし、女性と共に過ごす夜はまた別の恍惚であり、詩人はこの恍惚感に不安と疑問を抱いている。

「13 この拷問はいったい何なのだ、」

ヴェルレーヌは1874年8月、自分の罪を司祭に詳しく告白している。

肉欲のあやまち、とりわけ怒りによるあやまち、不摂生によるあやまち、…中略…肉欲のあやまち、僕はそれを強調した²⁵⁾。

詩人は聖体拝領の前に、肉欲によるあやまちを告白した。しかし、またぞろこの時期になって、過去の肉欲による快楽がヴェルレーヌを誘惑している。詩人はこの誘惑に抗おうとする。そこからこの「拷問」の苦しみが生じている。しかし、詩人はこの拷問がどこから生じているか知りたくはないのだ。いや、むしろそのまま、地上の誘惑に身を任せたいとさえ思っていることが、この疑問表現からも窺い知れる。最終詩行は、われわれのこのような解釈を正当化するに十分である。

「14 劫罰を受けたわれわれ、そしてあなたたち、聖人よ？」

ヴェルレーヌは、自らを「劫罰」を受けた者として表現し、自分の対岸に

いる者として、キリストやそれに関わるキリスト信者たちを「あなたたち、聖人よ」と呼ぶ。「劫罰を受けたわれわれ」とは、引用6の「人間はこれほど悪であり、ただ生まれたことによって、これほど失墜し罰せられているとは！」という表現がその意味を補完するであろう。この両者の隔たりが大きければ大きいほど、ヴェルレーヌは信仰のレヴェルで苦しむ。ここには、対立こそあれ、俗と聖の融合、あるいは聖なるものの勝利はない。「4 足よ、お前が踏み潰しているのは夢だ。」それゆえ「13 この拷問はいったい何なのだ、」とヴェルレーヌは叫ぶのである。

結論

本論でとりあげた詩篇は、ヴェルレーヌが回心して間もない頃創作されたものであった。回心の直後に彼が感じ取った「無限の幸福」(引用6)は、しかしながら、一体どこへ消えてしまったのか。ここにあるのは、回心前の、地上のはかない幸福への憧れだけなのか。いや、そうではない。ペトロの裏切りを連想させる第2詩行、復活の夢を砕く第4詩行、やがて地上の快樂へと詩人を招く第8、第9、第10および第11詩行。しかし、第7詩行にみられるように、詩人は完全に、意識して悪の誘惑に身を委ねているのではない。そのため、そこには「恍惚」(第12詩行)と「拷問」(第13詩行)が詩人の魂の中に同居する。言い換えれば善と悪、有限と無限の激しい対立が存在しているのだ。詩人が用いる語句の対照表現によって、これを読み取ることができる。以下にその例を挙げよう。()内の数字は各詩行を示す。

- 1) 永遠に聖なる『聖杯』(8)と、地上の一時的な「花々」(8)の対照。
- 2) この世のはかない「恍惚」(12)と、信者としての信仰から生じる自分を責める「拷問」(13)という葛藤。
- 3) 自らを「劫罰」(14)を受けた者として捉え、その他のキリスト信者を「聖人」(14)と呼ぶ「俗」と「聖」の対立。
- 4) 「踏み潰している夢」(4)の中に隠れて意味された「悪」と、「神の正義および愛」の対立。
- 5) 「酒」(9)のもつ二重性、すなわち永遠の命であるキリストの「血」

と一時的快楽としての「酒」の共存。

1) ~ 3) にみられるような、表面上明確な二項対立、および4) と5) における隠された二項対立という対照法によって、詩人は自らの信仰を赤裸々に表現している。それはいかなる信仰か。

それは、引用6に表現された「無限の幸福」を生じさせるような、単純な信仰ではない。それは、常に「俗」に戻ろうとする弱々しい自己の魂と、なんとか聖なるものに留まろうとする理性との、いわば壮絶な格闘が共存する信仰なのである。このような自己の信仰を、うそ偽りなく告白することこそ、きわめてキリスト教的信仰表明と言えるであろう。

注

本文中で引用される文献のいくつかは、以下のような略号を用いる。

O.P.C. : Verlaine ; *Œuvres poétiques complètes*, texte établi et annoté par Y.-G. Le DANTEC, édition révisée complétée et présentée par Jacques BOREL, Bibliothèque de la Pléiade, Éditions Gallimard, 1962

O.en P.C. : Verlaine ; *Œuvres en prose complètes*, texte établi, présenté et annoté par Jacques BOREL, Bibliothèque de la Pléiade, Éditions Gallimard, 1972

O.P. : *Œuvres poétiques de VERLAINE*, textes établis avec chronologie, introductions, notes, choix de variantes et bibliographie, par Jacques ROBICHEZ, Éditions Garnier Frères, 1969

Cor : *Correspondance de Paul VERLAINE*, publiée sur les manuscrits originaux avec une préface et des notes par Ad. Van BEVER, tome 1, 2, 3, Réimpression de l'édition de Paris, 1922-1929, Slatkine Reprints, Genève-Paris, 1983

1) Louis MORICE, *Verlaine, Sagesse*, Librairie Nizet, 1968, p.20

2) *Ibid.*

3) *Ibid.*, p.21

4) *Ibid.*

5) *O.P.*, p.172

6) *Mes prisons* in *O. en P.C.*, p.346

7) *Ibid.*, p.348

8) *Ibid.*

9) Baudelaire, *Correspondances* in *Les Fleurs du mal, Œuvres complètes 1*, texte établi, présenté et annoté par Claude PICHOS, bibliothèque de la Pléiade, Éditions Gallimard, 1975, p.11

10) *Cor.*, pp.98-99

11) *Ibid.*, p.103

- 12) *Ibid.*, p.121
- 13) *Ibid.*, p.130
- 14) *O.P.C.*, p.224
- 15) Éléonore M. ZIMMERMANN, *Magies de Verlaine*, José Corti, 1967, p.93
- 16) *O.P.C.*, p.240
- 17) *Ibid.*, p.258
- 18) *L'Évangile selon Saint Matthieu XXVI,33*, *La Bible de Jérusalem*, Les Éditions du CERF, 1978, p.37
日本語訳は『聖書』新共同訳、日本聖書協会、1990年に従った。以後の聖書の引用は、すべて *La Bible de Jérusalem*, Les Éditions du CERF, 1978 による。また、その日本語訳は『聖書』新共同訳、日本聖書協会、1990年に従う。
- 19) *Ibid.*, XXVI,34
- 20) *Ibid.*, XXX,74-75
- 21) *La Genèse III*,15
- 22) *O.P.C.*, p.258
- 23) *L'Évangile selon Saint Luc XXIII*, 44-45
- 24) *Cor., I*, p.147
- 25) *Mes prisons in O.en P.C.*, p.350